

江戸時代における丁銀の形骸化 - 銀貨の名目貨幣化 -

青山学院大学大学院 須賀博樹

本報告では、まず近世後期に江戸幕府が実施した財政的事情に起因する貨幣政策による秤量銀貨(丁銀)の形骸化過程を明らかにする。幕府は文政元年(1818)から明治元年(1867)に倒れるまで、一方で秤量銀貨の鑄造高を減少させ、他方で計数銀貨の鑄造量を飛躍的に増大させる貨幣政策を展開した。文政3年から鑄造された文政銀(銀36%、銅64%)の鑄造高は22万4981貫900匁で、これを金1両=銀60匁の公定相場に換算すると374万9698両になる。他方、計数銀貨の文政南鐐一朱銀・二朱銀の合計鑄造高は1633万1608両に達する。天保8年(1837)から鑄造された天保銀(銀26%、銅74%)の鑄造高は18万2108貫で、換算すると303万5133両になる。天保一分銀の鑄造高は1972万1000両ある。安政6年(1859)から鑄造された安政銀(銀13%、銅87%)の鑄造高は10万2907貫で、換算すると171万5116両に相当する。この値は嘉永一朱銀の鑄造高995万2800両と比較してもはるかに及ばない。

秤量銀貨の形骸化と計数銀貨の確立は安政6年の開港に伴う金銀比価の国際調整の問題に直面した。本報告では開港以降に計数金貨と計数銀貨がどのように比価調整されたかを明らかにする。具体的には、外国奉行案に基づく安政二朱銀の発行は外国側の抗議により挫折するが、勘定奉行案に基づく万延の改鑄[万延元年(1860)実施]により金銀比価の国際調整を果たし、幕府も巨額の改鑄益金を取得する。これに伴う混乱やインフレが大きかったが、短期間に処理され金貨体系が維持されたのは、既に開港前に銀貨体系は金貨体系に収斂されていたからである。

本報告における結論を要約すると以下の3点になる。文政・天保の貨幣政策(計数銀貨の発展)により秤量銀貨である丁銀は流通・発行量共に大幅に後退し、銀の重量による物価表示(銀目)は急速に形骸化した。近世後期の日本の貨幣制度は金銀銅(銭)の三貨制度より、銀が金の中に収斂された金・銭(銅)の二貨制度の状態に至る。しかし、江戸時代中には幕末まで丁銀は鑄造されており、銀目も形式的な形で存続・保証された。安政開港後の貨幣政策により日本の貨幣制度は金銀複本位制の形に戻ったが、実質的には金貨体系が外圧(つまり洋銀の大量流入と日本貨幣の流出)で崩されることなく、強固に維持されていた。この近世日本の強固な貨幣制度こそが日本金銀比価を無事に国際調整を果たさせる原動力になった。江戸幕府が明治政府に残した貨幣制度上の遺産は大きかったと評価できる。幕府は日本金銀比価の国際調整された状態、銀の金体系への吸収による二貨(金・銭)の状態というように、世界に通じる近代的貨幣制度の基礎が既に完成させ

ていた。結果、明治政府は「新貨条例」で円・銭・厘体系の貨幣制度、金本位制度を短期間で完成することができた。

参考文献：

- (1) 滝沢武雄・西脇康編『日本史小百科 貨幣』東京堂出版、1999
- (2) 拙稿「近代日本貨幣制度確立期における金銀比価調整」青山学院大学『文学部紀要』40号、1999
- (3) 拙稿「安政丁銀発行時における大坂両替商～為替両組・十五軒組合・住友家～」(近刊)